

口伝の海

Lyrics 4

渚  
言址

パレット

白がはばたくとき  
誰もが取り残される

新たなる憎悪と  
偽善に満ちた自虐に

緑が瞑想するとき  
誰もが息をのむ

寄せ集めに過ぎぬものを  
「全て」と呼ぶ愚かさに

青が微笑するとき  
誰もが崩折れる

空間的な広さが  
重量を持ちうることに

赤が消えるとき

誰もが渴きにうめく

作為的な拒絶と、確信と

その冷ややかさに

そこに僕は立つ

そこにパレットがある

(2001.3.18)

## 樹下

樹上の花は映す

雲と

大気と

そして流れを

陽光は花々の間を  
かすかにすり抜け

あらゆる音を単なる背景と変え  
寝転ぶ僕を包む

今しがた蜜蜂が

その蜜を飲み干し

その花びらを揺らし

一片の花びらを解き放った

僕は、その舞いに

陽光と影とを

同時にまとった舞いに

2重の意味を持つ

その涙をぬぐっていた

生は遙か彼方

限りなく

無作為に

しかも明らかに

すっきりと伸びていた

(2001.4.8)

## 湿潤な世界

つややかなフローリングに頬を当て  
耳を澄ます

滴のひとつひとつを聞き分け  
選り分けながら溶け込んでゆく

水・・・、さらには大気  
そしてさらには静寂という生物へと

その透明な空間では

固体も流体も無作為が唯一の法則であるという

論理的な思考は何ものをも生まず  
行列は固有値を有さない

床の向こうには湿潤な土がある  
そして星がある

瞑想という名の搜索の網に掛かるはずはない  
ひたすら掘削することではしか出会えぬ生物

それはこのフローリングのように  
しっとりとした湿潤な時間に棲むのだ

この比類なき静寂という生物を  
僕は飲んでしまいたい

(2001.9.10)

### 危険な風

風がモノクロームの独白を歩む  
おめでたい信賴についての  
また鉄槌を下すことについての  
さらには本能的な狂気についての  
それらに至る道筋を示す

いかなる過剰な防衛も許容すると、お前は笑うのか  
滑稽な殺戮こそお前の通行を愉快にすると？

お前はあざ笑うのか

1 次的な精度が2 次的な精度を上回ると？

お前は精密な、かつは面倒な考証は好むまい

風は踊り狂う時計にも似ている

正確無比な拍節を有しつつ

無作為に踊り狂う時計は巻き込んでゆく

嘲笑と熱情をごちゃ混ぜに

その渦へと飲み込みながら

天国で怒りを呼び覚まされると

誰もが思い設けぬその裏切り行為に膝を着き

次元数の増えていることも

その故に価値基準が異なることも

気づかぬままに泣き叫ぶ

空気を切る風がある

竜のように空気を切る風がある

そいつには十分用心しななければならない  
風通しのよさを好む者に魅入られ  
鍵を盗み取られぬよう

(2001.9.13)

ある島にて

ゆるやかで、かつ確信に満ちた張力が  
組み合わされた掌を中心にして  
舞踊を風と変え、重力を詩に変える

白い壁に映る青い大気は

ゆるやかな弧を追跡するうち

自らを犠牲にして他の色彩を濃密にしてゆく

私に託された慟哭は

この色彩のざわめきに静められ

静寂のうちに憩うために大きく呼吸する



彼女とともに回りながら

その肩越しに広がる濃青色の海の上を滑り  
浮遊するひとつの種子となること――

僕は感じるのだ

私に託された無数の涙が

この舞踊によって彼女に抱き上げられているのを

僕は想うのだ

この舞踊を花開かせた人々の生活を

ここに流れる時間のゆらめきを

(2001.9.14)

## 創造者たちの里程標

たったいま、ひとつの合流が行われ  
かすかな屈折率しか持たぬ流体の滴が

無表情な肌を潤してゆくとところだ

すると――、制御することを放棄した創造者たちは  
融和を希求する時間をもてあまし  
無ままでをも喰らい尽くしはじめ

潤いを増したその肌はうごめく

まるで前進する青虫のように波うちながら  
創造者たちの流し目を捕らえて惑わしてゆく

生の秘密をそっと吐き出すかのように

流体はきわめてかすかな音を漏らしながら  
その肌を潤してゆく

その創造者たちの目に映じる里程標を

我々は次のように呼んでいる

「エクスタシー」と

(2001.9.14)

ある数日間の出来事

自転車に乗った風が

改悛の涙を流しながら坂を駆け上がるとき  
それを目にしたものたちは問い掛ける

「新たな憧憬に満たされるだろうか…」

その風の通り過ぎたあとも

普段どおりにコオロギは鳴き  
いつものとおりに花は開いた

しかし、誰もがふと遠くを見やり

思いをはせるとき

小さな時間の停止が生まれた

「新たな憧憬に満たされるだろうか…」

あるときは渡り鳥がこう話した

「紫の国では疫病で幾多の命が奪われた」と

またあるときは雲がこう話した

「オレンジの国では洪水に覆われた」と

そのたびに、虚空に視線はさまよい

誰もが呟いた

「新たな憧憬に満たされるだろうか……」

誰もが、それほどに大気とは微妙なものだと知っていた――

数日の後

遠くから来る気配に

誰もが同時にぴたりと全神経をそばだてた

風は再びやってきたのだった

何と今度はスケートボードを漕ぎながら

新たな憧れに目を輝かせながら

それを見たものたちは

ほっと息をつき、言ったものだ

「やれやれ、何とか今回も救われたわい」と

(2001.9.18)

## 自転車、道

大気は全ての静物と同様にそこに置かれている  
自転車を走らせる

失語症のうたうたいは木々を巡り歩く  
横切る猫

明日のこと、明後日のこと

大気もまた静物と見える

梢を潜り抜け、空は動かない

ランボーは暴力的な色彩言語を発明した

僕は新たな地平を見出した

ささやかな

あらゆる存在のひとつひとつを認識する

人々はなぜそれらを見せず、次々と捨ててゆくのか  
あらゆる存在のひとつひとつを認識する  
その向こうにあるものを見るのだ

時間への祈り

この世界には淡々とした哀しみがある

拡張するものはなにひとつない

消去されてゆく凹凸

曲線的な

ランダムな

そして無数に散らばる通奏低音

世界を覆うヴェール

その表面には柔毛がなびいている

時間の波がそれをなびかせる

僕は自転車を走らせる

僕は新たな地平を眺めた

そのような道

風が泳ぐ

(2001.9.21)

コーンウォールのトリスタン

聞いたこともない言語が話される  
あの岬には悲歌が刻印されている  
コーンウォールに倒れたトリスタン  
グラヴエ

薄汚れた包帯に潮風が吹きつける  
その椅子には大気の重量が腰を下ろしている  
コーンウォールに倒れたトリスタン  
エア

崖を愛撫する海の舌先は粘性的で

振り子のように放物線を上下する  
コーンウォールに倒れたトリスタン  
ラルゴ

小刻みに震える灌木の葉  
丈低い草々の中に見え隠れする小径  
コーンウォールに倒れたトリスタン  
アルマンデ

遙かに幻聴を誘う  
遙かに幻想を誘う  
コーンウォールに倒れたトリスタン  
彼方に船を臨むか

(2001.9.21)

## 印象

ヴェランダで光が眠っている



薄紙一枚震わせるのがやっとの微風

歌が溶け込んでいる

浮遊する歌が溶け込んでいる言葉

透明を含む色彩がかき回されたときに現れる白  
無防備で誇示的な白

安易に選ばれた何物もない  
それらを選んだ者が再び選ぶであろう

映像には存在しないもの——  
絵画はそれについて口を封じた

眠り込む光を雲が包み込む  
ミントが背伸びする庭の片隅

沈黙を宿すときにだけ現れるもの——  
それを夢見ている

ヴェランダで光が眠っている  
歌が溶け込んでいる

(2001.9.23)

## 閨房

うちふるえる指で

その青いカーディガンのボタンを外し

透明な皮膚の数層下にあるゼリーに触れる

持続的なものが必要ではなくなるほどに

豊穡な毎日

その中に咲き誇る花々

喪失感に纏わりつかれ

焦燥の中にうねる——官能

忘却の河は涸れた

生の可能性を最大限に享受する  
生の可能性を最大限に制限する  
この2つが同義となるとは・・・

私は生に触れているのだろうか  
それを確かめることはできない  
たとえその体から汗が吹き出たとしても

これが最後の部屋だというのに

(2001.9.26)

## 海景

原風景を探して辿り着いた庭には  
海へ向かう戸口があった

雲は厚く海面に堆積し  
息を呑んだまま

彼岸花の赤を吸い寄せる

戸口は数本の樹木に護られ

そこへ到る小径は白い花が風に慄えている

吸い寄せられるように、私はその庭を渡る

瞑想の中に息を潜め

私はその庭を抜ける、戸口へ

その戸口に立つ者は想うであろう

時間という暴力的な略奪者のことを

翡翠の水は

まるで湧き上がるかのように

遠くほど高く聳え、視線を僅か上方に導く

迫り、近づきつつある水平線の向こう側には

おそらく深く切り立った谷がある・・・

私は見た

世捨て人となった神々の生命が  
隆々と息づくのを

私の足は岩に貼りついたまま動けない  
あの波に呑み込まれるまで

空間の呪縛にうごめき悶え  
近づく者——

私はそれを待ち受けている

(2001.10.9)

### 季節の先に

白い光に満たされた浜辺に笛をにじませ  
風にあおられる音色のすずろかに

一握の砂のさらさらと

陽光にきらめく水面のごとく

流れ落ちる

こぼれ落ちた砂のひとつひとつを  
拾い上げてみせよう  
音色のみを頼りに

この季節の先には想いがある

\*

ひとしきり吹雪く暗い日に  
祈りのみもて書き綴るとき

舞い落ちる白い雪片の  
地面に吸い込まれるように  
消えてゆく

吸い込まれた雪のひとつひとつを  
咲かせてみせよう  
その微かなふるえのみを頼りに

この季節の先には温もりがある

\*

野原が花々に彩られはじめた日に  
あらゆる音が蒸発してしまう

髪に、また肩に、  
はらはらと

蝶の舞うごと

ただひとり笛を吹き

この無のなかに響かせてみせよう  
お前達の夢見る音だけを

この季節の先には充溢がある

(2001.10.9)

予期

私の足の指先に  
私のその指先に

新たな闇と

目を射る、数えることの可能なエネルギー―

あのグレースケールの砂洲の果て  
月に鎮められている水面

彼方にちりばめられたビーズのゆらめき  
4つの視線の交差する――

ドームを縁取る雲、おお雲

お前は我々を通過する、我々の内なる起伏を

唇を求める唇

なにもものをも映さぬ、つかの間の官能



潮は満ち、波はポリウムを増す  
あらずさることなく、待ち受ける——

私の足の指先に

私のその指先に迫るもの

それは私自身のものではない

(2001.10.23)

## 略奪の後

ある作者の無題の詩に寄す

まじりけだらけのこころの内も

この夜は解き放てとささやく

まじりけだらけのこころの内も

闇を泳ぐ蝶の群れと散じる

何者も現れず、何者かが潜む

引き絞られた空間ごと滑ってゆく・・・

私はさながらフェリーのデッキで風に吹かれ  
対岸と思われる影を見ているようだ

まじりけだらけのころの内も

分光器でスペクトルを取り出すことはできる

まじりけだらけのころの内も

一滴の試薬によって平衡へと動きはじめる

略奪の後に残された汚わい集る甲虫の羽がきらめく  
連鎖の中に封じ込められたものがあつたのだ

私は呆然と立ち尽くす

それはさながら巨大な都市か蟻塚のようだ

絶望的な略奪、略奪、略奪——

そしてまた・・・

夜が白みはじめる

(2001.10.23)

表面張力

雨の予感が

空を舞うシテを

遙かな視線に沿って運び

時はねじれるかのように振る舞い

おしなべて

人は気づかぬうちに

街を

その艶麗に薄く漂いたなびく無に対する触感で自ら満たしてゆく

そと

そと・・・

生は息づくか

白く磨かれてひんやりとした岩と

温かい肌は漂泊を促す  
我はぬくもりを盗み歩く者なり

天蓋を覆う雲から雲へと渡り歩く舞人  
その衣から撒き散らされる夢幻の種子

目の当たりにする肢体は反り返り  
私が抽するものを呑み込んでゆく  
喜悅とも苦渋とも定かならぬしびれとともに  
舌なめずりして

雨の予感が導くのか  
雨が待ち受けている  
雨——

雨・・・その表面張力が世界を見下ろしている

(2001.11.3)

## 自我

かつて 此岸は  
社会と呼んでいた 対岸は  
何と呼んでいたか それは覚えていない

レールは2つに  
さらに4つに 8つに  
分かれてゆく その先

此岸は かつて  
秩序と呼ばれていた 対岸は  
憧憬と呼んでいた 僕は

僕・・・  
その一人称  
車中に揺られる者

かつて あの夕陽は  
夕陽ではなく 終焉でもなく

永遠の象徴だった

僕 という 一人称

その軌跡を抱えていた かつては

・・・今は？

水平線を中心にして

上下に広がるだけの空間

そんなものが海や空であろうものか

僕 という 一人称

その衝撃的な存在

それをなぜ置き去ることができたのか

そも 今 それは

どこに？

滑り込もうとするこの駅に？

かつて この男を

僕 と呼んでいた 今は

何と呼びうるのか——  
まさか、単なる「自我」とでも？

(2003.5.13)

## 死の街

コバルトのように青い花びらを持つバラに  
朝露の滴り落ちる中を  
私は無人の街をさまよう

その被造物は、この街から  
ある次元を奪い尽くしているかのように  
息一つしていない

光は揺らぐことなく固定され  
その影はべた塗りの色のように  
死んでいる・・・

右にも

そして左にも

青いバラ、バラ、そしてバラ――

私はその花卉に触れてみる

まるでバターのような手触りと

血の気のない肌のような冷たさと

太陽はなにもものをも温めることなく

色をのみ与えている

まるで全てが死んでいるようだ

私は息苦しさに締め付けられ

今にも気を失いかけ

青いバラの傍らに膝を折った

私は地面の砂を掘り

それを撒き散らしてみたが、それはまるで

破碎されたプラスチックのようだった



この青いバラを作出した者は誰なのだ  
存在し得ぬと言われていた青いバラなど  
誰が作り出したのだ

ふと、その鋭いとげで指を切った私は  
立ち上がり、滲み出た血をその花卉に塗りつけた  
するとどうだろう

光はかすかに揺らぎはじめ  
空気は慄えを帯びはじめ  
色彩は温かく散らばりはじめたのだ

そして青いバラは  
次々と赤く染まっていった  
触れるとびろうどのように暖かな赤に――

気の遠くなるような眩暈のうちに

私は意識を取り戻しつつあった

しかし――

既に街は死んでいた

(2003.7.19)

## 眠る本

一読の後

再び開くことなく

鞆の奥底に忍ばせた1冊の本

そのときから――

潮が満ちるように、次第に

大気のゆらめきが感触を授け

僕自身の孤独が視線に宿り

あらゆる事物が息づき始め

僕の観察を受け入れるようになったのだ

再び？

言葉は本当に無力なのだろうか  
そのことを確かめたかった

生活は整然と並べられるべきだろうか  
ただの社会的規範というだけの意味だけでなく・・・  
感覚というものは受動的なものだろうか  
そしてそれは浸透を欲するものなのか  
それとも固定を欲するものなのか  
この世界は色彩に満ちていると言えるのか  
点描によって全てを表現することは可能なのか

気まぐれな生

多様に満ちた世界を作り出そうと  
次々と類似に類似を重ねる者たちとはおさらばだ  
僕の手元には一冊の本が眠り  
黙って問いかける  
再び開くことはない本が眠っている

(2003.9.26)

陸をなめる冷たい波  
ねっとりとした薄い皮

口を噤む泡

奥行を有する空気は何ものをも包まない

ここへ君を呼び寄せたのは

この僕か、それとも

封筒の中へ忍び込んだ

比重の高いこの空気か

失われたことを知らせる者は

既に死に絶えてしまった

生まれることなく

造り出されるだけの世界があると、君はいう

削り取られ

研磨されることを悦ぶ君は

薄い波の中に足を踏み入れる

音もなく消える泡の中へ

天井のない洞窟のようなこの湾の最奥で

僕は初めて君の姿を俯瞰する

波にまとわれつかれる足の指から

白い服に包まれた肢体

印を結ぶような仕草の手

そして黒い髪

ふっくらとした頬

遠い眼差し

その彼方に続く深緑色の水面

それをはさみ込む断崖と緑の丘

それらを吸い込むねずみ色の空

いち日毎に途切れてしまうことに

怖れおののく僕は

今や還ることなど思いはしない

連続とは異なる連綿とした時間

そのことを君も気付くだろうか

波に包まれるなど思いもよらぬ、ここでは  
削り取られ、研磨されることを希う  
君は還ると言い出せるだろうか

(2003.10.2)

## 彼

その胸元に組み合わされた掌  
伸び上がるつま先

お前がずっと遠くに望むもの  
眩暈を起こさせるほどの広さ、広さ、広さ

僕は弾いているのではない

吹いているのではない

お前の望む遥かから渡ってくるすべて・・・  
それを反射しているのだ

眼下をくねる細く白い川すじ

幾千年前に流れてきたのかわからぬ  
大小さまざまな無数の岩

その川筋に向けて反射しよう

その川下には街がある

僕たちの生まれた街がある

今居るこの場所が遠く小さく望める街

この谷を下りれば帰ることのできる街

僕たちは知っている

人しか存在しないとどこに何があるかを

人しか存在しないとどこには何がないのかを

僕たちは知っている

ここでは誰にとっても同一の知人がいる

いつでもどこに在ろうとも、いつ誰と居ようとも

彼はいつも、その人に語りかけ

その人の視線を、ふっ、と吸い寄せる

僕たちは有限の世界に生きている

しかし、僕たちは知っている  
彼といることで世界は無限な広がりとなることを  
今、お前はその無限の遥か遠くを望んでいる

大きく息を吸い込み

お前は組み合わせた掌をほどく

まるでそれが儀式であるかのように

大気との結婚のときであるかのように

(2003.10.6)

## 部屋

僕の手の届かぬ場所へ

その声の哀しさ——

哀しさ、と

君はそれを理解できない



僕の立つこの部屋の広さを

——戻り、振り向く

みずから見出すことを

予測することの幻滅と幻影に沈める——

それは胸でも、掌でもない

君が差し出すそれは、ただの「時間」だろう

扉を開き

戸外の大気に融かされるがまま

ああ、そしてこの胸の奥に射し込み、拡がるにまかせた陽光よ

お前の、その——掌こそ

・・・僕の心

空間とは何？

それは君の世界を形にするものですか？

あの木間から洩れるものを

——流れに導き、ちりばめること

おお、間接的に君が創造した世界よ  
それを迷路のように楽しんでいればいい

心の中で呟くことなど——無感覚  
大気に融け込んだ僕自身に包まれる——そのことを

遥かに遠いようにみえたものが  
いま、この胸に沁み入り、拡がっている

僕自身であることの——その意味を体現する

僕自身であることの・・・同時に

何ものにも妨げられぬ・・・同時に

融合体であることの——その意味を

君のその、ふるえる指をくれるなら

君自身から、かすかに融け出そうとしている・・・その指を

僕の手の届かぬ場所へ

その声の哀しさ——

その胸の奥の

君自身の気付いていない広い部屋へ——

——戻ろう・・・

(2004.1.1)

## 唄

心をすべて唄いあげないうちに  
君はいなくなりました。

肩のところで短く切りそろえた髪に  
かすかに聞こえる、遙か遠い背中への憧れ

うねるような重さを無意識のうちに雲散させ

それぞれの粒子に浮遊を与える——その視線

心をすべて唄いあげないうちに

君はいなくなりました

いつだって、ほんとうはどこを見ているのだから、ちっともわからずじまいのまま

たたんでしまっ——

紙の上でゆったりと踊るような、そしてうとうととするような——「ソ」の音の

うたうたい——

君は知らない——

今でもその唄はうたい継がれてているんだよ

(2004.1.3)

## To Sea of Silence water

はらはらとした歩み、海へと続く小径  
僕であるところの——この隣人

君が言い出した

「曇りであれば、小径自身が海へ顔を向ける」と

祈りの風がスカート裾を引く・・・

白いウェディングドレスの裾を捧げ持つ、ひと組の童子のように

砂浜はまだ見えない

けれど海原は望める

小径の両側を縁どる叢が知っているととは思えない

理知という無用の創造物を生み出した人間の神など

遠く、そして、広い

抱くことも、抱かれることもできないほど

白く、ほの暗い雲の模様が君を先導する

生の遙か彼方に感じられるという、Sea of Silence water <

無であるように見えるものを並べてみるという

それを繰り返してきた僕を、君は連れて行くという

陽光は、なぜこの丘に棲むことが適わぬのか

君の抱く、最愛の生である陽光は、なぜ近付かぬのか

止めることができるはず――

僕の背に広がる、被造物の世界に戻ることもできるはず

が、

しかし

僕の侵した人間の世界、毒づいた世界

そこで犯した罪とは単なる冒涇でも侮辱でもない

君は微笑するのか

ああ、その、時間を揺らし、大気を薄め、僕を魅惑する君の微笑こそ、海には似つかわしくない

なのに、知っているというのか・・・

彼方にたなびく雲の、遙か向こうにあるという、Sea of Silence waterを

差し出された掌の、ほのかな温かさ

そこに沈む無邪気な企みを、この小径は容認する

私達の行動の、衝動の、その意味するところ  
いや、その事実そのものさえ——沈む叢

小径を歩む、僕たちにも  
いずれ砂浜が見えるにちがいない

終わらせることのできぬ「To」  
その始まりとなる砂浜が

(2004.1.4)

渡河

時計が動き始めます

前へ

前へ

動作が回転を始めます

跳べ

跳べ

冬の日差しの薄さが

記憶の肌を流れるように風を呼び寄せ

このそよぐような冷たい微風は

あらわになった花芯の色を

その日差しの中で燃やそうとする

目覚めようとしているのです

感情は映像の中に目覚めようとしているのです

我々の創造物が我々に従属せず

自らの視線を遠くに向け始めたとき

それらは水面や鏡のようなものに映し出され

ひとりで佇む「我」として感情を持つのです

なぜ傷だらけの透明なアクリル板に写ると

それは静かに受け容れることができるのか――



その謎を解き明かしてみたい

ヴェランダの、氷のように冷たい手摺に掌を置き  
私が眺めているのは現在ではない

ある秘密の想いが満ちはじめようとしています

跳べ  
跳べ

(2004.1.9)

流砂

風に吹き溜められた砂が

斜面を流れてゆく

一様に薄く均一に流れるのではなく

一筋の線の流れ

流れながら溪をつくる

吸い込まれるような無音のくぼみの中に  
空を流れる雲を見上げる――

滲むように白く

水の中に噴出された粘質な白濁液のように  
触手のように拡散する雲を

僕は認識というものを

底知れぬ海の深さを

自分を大気と化すことを

陽光として溶けてしまうことを  
想っている

あらゆる「表示」が消えてしまえばいい  
あらゆる「標識」が消えてしまえばいい

くぼみの中を立ち上がり

遙か遠くに見渡すと

かすかな波頭の白さと

かすかな潮騒が僕を招いた

(2004.1.9)

## 都市の夜

強風に吹き飛ばされ

また

氷に閉じ込められ

この荒野は乾ききっている

反射する何ものもなく

黒々とした大地が続き

わずかに

空には星が瞬く

眩きなどない——

沈黙から

一足飛びに

叫びへと追い詰められるのだ

かつてここに

都市というものがあつた、という  
そこにも夜はあつたのか？

それは知らない

多くの人間を擁し

繁栄を謳歌した、とか

何がその都市というものを滅ぼしたのか

それは知らない

煌々と輝くネオンのことを

聞いたことがある

そこにも星はあったのか？

それは知らない

気をつけなければ・・・

罨の臭いがする

夜の間洞窟に潜んでいる僅かな人間でも

この精巧な罨を作れるほどに、まだ手強いのだ

おお、月が出る

一気に大地が青く光る

地平線から昇る月の

目に見えるほどに速いこと！

見晴るかす彼方に大きな窪地が見える

まるで亀が砂の上に引っくり返った後のようだ

なんと美しい円形をしていることか

これも人間たちの創造物なのか

いつかまた

あの者たちの繁栄がやって来るのだろうか

やっかいなことだ

今のうちに根絶やしにできないものか

それとも、

人間の飼いならしている家畜を食らうのも

この厳しい寒さの中で餌を探し回るよりは

よほどましか・・・

(2004.1.17)

朝の車内

海がある  
家がある

線路が左へ折れる  
朝の陽射しが後ろへとそれてゆく

海がある  
家がある

線路が右へ折れる  
車体が傾く

海がある  
家がある

トンネルをくぐる  
まだ、さっきのトンビは滑空している

海がある  
家がある

車輪が眩く  
僕を運びながら

海がある  
家がある

——歌がある

### 風吹く空

いつまで風は吹くのだろう  
この街はいつまで在るのだろう

静かに慄える涅槃の夢  
微動だにせぬ僕の影

(2004.1.27)

この街の彼方に強い雲が湧き起こっている  
その引力に抗することができない・・・

ここまで、私は歩いてきた  
けれども、ここから先は？

惹きつけられている半身が閉じ込められ  
それに抗うことで、かろうじて生き続けている

いつまで風は吹くのだろう

この壁はいつまで私の諦めであり続けるのだろう

寂寞が欲しい

あの静寂の中に解放された「個」の呻きが欲しい

無念無想という馴化

その周囲を防御する形式化された想念の残骸

私の立ちつくす、この街



その彼方に湧き起こりつつある私の憧憬の雲

自由という果てしなく広い孤独よ

私に來れ

(2004.5.3)

## 絵画

けたたましく鳴き叫ぶ白い鳥は見下ろしている

岸壁に座り込み、漁網を繕う麦藁帽子を

宙に躍り上がる銀鱗の落下し、水面を乱す小さな音は

ひた、という短い響きを、すぐに水中に吸い込ませ、消えてしまおう――

目の前に浮ぶ漁船は、船溜まりの奥から忍び寄る波に

船尾から船首へと、ゆっくりと揺れを伝えている

私は糸を緩め、指先で共鳴を待ち受け、そして耳を澄ましていた

防波堤に遮られて見えぬ外海のうねりが砕け散る響きを

強圧的な陽射しが、大気を重苦しく淀ませていたけれど

繰り返す擦り寄ってくる音の揺らぎと海風が私を清めてくれる

見るがいい、慄えをまといながら海面から昇ってゆく、あの螺旋状の粒子の帯を

うねりに持ち上げられ、波の谷間に隠れることを繰り返す、あの螺旋状の粒子の帯を

この絵画の奥底の、さらにその遥か彼方へと続いてゆくものよ  
私の中で織り上げられるのをじっと待ち受けるものよ

ああ、次第に薄れてゆく自らの存在の感覚

とめどなく流れ出して彼方へと追い縋ろうとするもの——

私の中にあつて私のものではない——その感覚こそは  
私の探していたものなのだ

羽を広げ飛び立ってゆく、あの鳥には見えるだろうか

海面を爪立ちながら羽毛のように舞う私の憧れが・・・

(2004.8.13)

## 岬

その岬を取り巻く海は、空を映している  
模様でもなく、色彩でもない空を

おお、互いの憧れをもって掌をつなぎ、  
抱き合い、溶け合う——

その拡がりへ吸い込まれてゆく

構造的なもの——奥行きと・・・

本質以外のものをねじ伏せ、なぎ払う——  
マッシュブではない質量——

そのような、忘れられた角度を

自負として、僕は提示するつもりです

形式を破壊することは許されている

一方で「うた」を踏み外す危うさ

その中で飛翔と集中を同時に実現する

そのような、忘れられた伝統を

啓示を——僕は解き放つつもりです

ああ、大気よ

許しがたいのは、停止と忘却ではないか？

おお、海よ

許しがたいのは、不連続と虚無ではないのか？

無意味な分断と破碎ではないのか？

この巖だらけの突堤に迫り来る世界の広さ

まるで、この足下の一点が

あらゆる空間を吸い込んでいるかのような——

ああ、この陶酔に満ちた存在感・・・

それを投げ込んでみようではないか

(2004.9.23)

帰還

既に郷愁の飛び去った、わたし、へと  
私は帰るのだ

乾いた音をソロで奏でる

針葉樹の林までが

忍び寄る微風に傷つく——

そのような・・・世界

跳べ

俯瞰せよ

おお、この両掌を見るがいい

この両掌の犯した数々のわざ

無数の喜悦と悲歎をなだめた者よ

お前の紡ぎ出す空しい慄え

あの樹冠をそよがす波が

俯く懐へと触れてくる

恍惚の中に立ち尽くす木々

それを縫うようにして

私は帰る

私自身にしか辿り着くことのできぬ地へと

(2004.11.2)

## 海沿いの小径

かつては主要な街道であったその道は

今では歩く人もないが

あふれるばかりの優しい陽光が沁み込み

歩みを進める私たちを、昔のように包んでくれている

その海沿いの湾曲した道は

私の原風景に通じているのだった

あなたを背負ってでも  
私はそこへ歩いて行く

あなたは菱形のぼやけた紋章を見つめている  
光の分散し、虚空に投影された紋章を

その紋章こそ、打ち棄てられ、野晒しにされた詩人の墓所の在処を  
証言するただひとり残された者であることを知っているのですね

右手の小高い丘から、左手の断崖の下へと  
大気がそっと息を流して私の汗を乾かしてくれている

伝説にしてしまおう  
そうして私たちは、その果てに消えてしまおう

ああ、粒子の海原を左手に遥かに見渡してごらんなさい  
あなたにも「うた」が聞こえるだろう

誰が声高に「歴史」を語ろうと  
そんなことは関係ないのです

あなた自身のうたが、まるで伝説の叙事詩のように  
私をとらえて放さない

あなたの掌を取るこの掌を信じていてください  
地下牢の中で吐かれた棄て台詞の数々など忘れるのです

あの原風景からひとり立ちさせるとき  
そのうたはきつと波のように世界に伝わってゆくのです

だから、もうすこしだけ、さあ私の背に乗り  
もう少しだけ目を閉じてはいけません

その代償として、この大気が  
あなた自身の肉体を所望するというのなら  
おお、私も同様に呑み込むがいい！

(2005.1.1)



## 雪夜

漆黒の暗闇を降りしきる雪の  
その軽々とした睡いのゆるやかさ  
結晶の格子の上に積み重なるにつれて  
星々のわずかな瞬きを蓄えてゆく

わずかな風が動くたびに

一団の結晶たちが少しだけ風下へ流され  
木の陰、斜面の足下へ吹きだまる  
森の中では地面の傾きが積もってゆく

少しずつ、少しずつ格子を解きつつ

冷気を増して沈んでゆく

呼吸を失いながら

凍りついてゆく

無数に舞い落ちる雪の静かな着地を  
音もなく受け止め続ける者もまた

雪、雪、雪――

その軽々とした掌

あらゆる鼓動は気配を吸い取られ  
隠されているだけで  
ひそかな営みとして  
生きつづけている

楽しげな、温かな部屋が見えないか  
雪たちの深い眠りの向こうで  
やわらかに守られているのを  
感じないか

無数に舞い落ち、静かに着地する  
音もなく受け止め続ける者がいる  
雪、雪、雪――  
その軽々とした掌は、あたたかい

(2004.2.6)

## 傾いたページ

斜めに傾いたままの

その本のページを眺めている

文字で書き記された海景

それに注がれていた視線を辿る

かすかな疼痛が刺さり

次第次第に私自身のものとなってゆく

視線が海景との境に見出したものこそ

すなわち、この文字を受精させたもの

陽光と泡沫との邂逅が生み出すもの

ひらひらとした更紗のヴェール

視線が吸い込まれようとする

じりじりと吸い寄せられてゆく――

しかし、そのたびに裏切られる  
雲と、風のそ知らぬ軽いひと薙ぎで

さまよい、慄える現実の「我」が  
返し波とともに砂の上を遠くへ引き摺られてゆく

この本も恐らくそのようにして  
するりと傾いたものにちがいない

喪失の鈍い痛みが散らばってゆく  
薄められてゆく

そのままに筆が執られ  
記されてゆく――

そうした本の文字を追ってゆく  
傾いたままのページを眺めている

(2004.2.13)

口伝の海

木々の間をジグザグに

右手で幹を触れ

次には左手で幹を触れ

飛び跳ねるように歩いて行く

ああ、何て美しい陽射し

宝石を梢に撒き散らしながら

森閑とした中に潜む生きものたちを

うきうきとした舞踊へと誘い出そうと

どこへ通じているのか知っている

この木々をまっすぐに抜ければ

涯しない広がりを迎えてくれる

ああ、何とわくわくする

まだか

まだ聞こえないか

ああ、葉擦れの声がする

無数のひそひそとした声がある

森はまだ深いようだ

リスがするすると見え隠れしている

梢、梢、また梢

この手に触れた幹の遥か上に

歩きながらでは聞き逃すかもしれない

立ち止まれ

耳を澄ましてみよう

まだ聞こえないか

葉擦れの音がある

さらさらとした音が

ある瞬間は流れるように連続して

ある瞬間は途切れ途切れに

ああ、ささやき交わす

葉擦れと木洩れ日

まるでひとつがいの白鳥が

水面で寄り添い浮ぶように

さて、再び木々の間をジグザグに

右手で幹を触れ

次には左手で幹を触れ

飛び跳ねるように歩いて行く

どこへ通じているのか知っている

この木々をまっすぐに抜ければ  
漕ぎしない広がりが増えてくれる

ああ、何とわくわくする

まだか

まだ聞こえないか

まだか

まだ聞こえないか

あれは何だ

あの木々の間から望める白い世界は  
まるで無であるかのような白は

それでいて懐かしげな白は

ああ、あれこそがそうだ

まっすぐに行こう

道しるべの木々たちよ

動けぬお前たちはなぜ、この道を知っている

おお、遂に抜けたのだ

涯しない広がり

遮るもののない海と空

粒ではなく、大気そのものに充溢した陽光

そして眠りの中のようなこの音・・・

森の木々によって遮られていた潮騒

ひたひたと、さらさらと

水と砂が愛撫し合うひっそりとしたさざめき

木々たちよ、お前たちが守っていたのはこの海か

生の秘密を奥深くにしまい込んだこの海か

梢伝いに森の奥までその神話を届け



この私を連れてきた——海

それにしても似ている

この潮騒は、あの葉擦れの音に・・・

もしかしたら同じ言葉を使っているのだろうか

そして、この海原の彼方へも口伝されているのだろうか

あの空と海原の境を越えて——

森よ、お前は今、微笑したか？

(2004.2.14)

## オール

ひた、ひた、と

ボートを漕ぐ

ああ、ひとりであることの

同時にひとりではないことの

何という心地よさ

ひた、ひた、と  
オールがゆったりとうたう

水面を嬉々として跳ね回る陽光が  
私を深呼吸させる  
あの森の奥へと導く

ひた、ひた、と  
船べりを拍く小さな波、小さな波、  
小さな波、小さな波

背中を暖める陽射しが  
私の漕ぐ速さを緩める  
ようそろ——、ようそろ・・・

ひた、ひた、と  
まるで永久のごとく漕いでゆく

ああ、ひとりであることの  
そしてひとりではないことの

何という遙けさ

ひた、ひた、と

ボートを漕ぐ

ああ、彼方の雲が白くすきとおる

(2004.2.18)

道を歩く

アスファルトの亀裂が続いている

それを境界にした片勾配

空までが傾いているような

辿っつていこうか

まだ日は高い

こういう傷には親しい

錆びたガードレールが続いている

それを境界にした草むら  
道がゆるやかに曲がっていく

辿っつていこうか

まだ日は高い

こういういびつさには親しい

滅び行くものとしての時間

それが歩いてゆく

僕より先に

辿っつていこうか

まだ日は高い

こういう速度には親しい

物理的の広がりとしての≡世界≡

それを拒む者たち——

既に都市は遙か彼方後ろになっている

歩こうか

まだ日は高い  
こういう1日には親しい

(2004.3.8)

## 鉄路

あうあ

ありいある(走り出す)

えんゆうう(電柱)

あやる(曲がる)

まあ、あやる(また、曲がる)

耕された水田が広がる

そこで育てられるであろうもの

それがもたらす恵みの小ささと愛しさ

海へと通じる川へ向けて  
畦に仕切られた平らな耕地  
耕された土の表面が続く

あうあ

あわお、わらる(川を、渡る)

ろろえ、ろろえ(どこへ?、どこへ?)

煙るような雨が土をみたしてゆく  
右を見ても、左を見ても  
鉄路は平地を切っている、と知る

人が耕すのはなぜなのか  
埃や泥にまみれて  
整然と水を引くのはなぜなのか

おうえ

えひあいえる(駅が見える)

嬉々として、お前は指さす

(2004.3.28)